

養護教諭による「命の授業」の授業研究(1)

斉藤 ふくみ*・木下 正江**・森よし江***・金田(松永) 恵****

(2009年9月15日受理)

A Practice Research on Teaching about a Lesson of Life by a Nurse-teacher (1)

Fukumi SAITO, Masae KINOSHITA, Yoshie MORI and Megumi KANEDA(MATSUNAGA)

キーワード: 命の授業, 養護教諭, 授業研究

要旨

近年、交通事故や虐待、犯罪の犠牲者となって命を失う子どもやいじめを原因に自殺する子どもが後をたたない状況が続いている。このような社会背景から、わが国では1990年代後半からの教育実践が行われるようになってきた。2005年には、全国の6割の中学校でいのちの教育実践が行われている。本研究は、I県内公立A中学校のB養護教諭が実践する「命の授業」の授業研究を行い、授業の意図や授業構成、生徒の反応などを分析し、その実践の意義を明らかにすることを目的とした。

I はじめに

2009年度上半期(1～6月)の自殺者数は1万7076人と過去最悪だった2003年に迫るペースであると警察庁の発表があった¹⁾。年齢別では19歳以下は623人(2006年度)²⁾となっており、このような事態に対して文部科学省は「児童生徒自殺学校対応の指針」をまとめる方針である³⁾。い

*茨城大学教育学部教育保健学教室 (Department of Education Health, College of Education, Ibaraki University, Mito, Japan)

**水戸市立第一中学校 (The First Junior High School in Mito)

***水戸市立第五中学校 (The Fifth Junior High School in Mito)

****茨城大学大学院教育学研究科 (Graduate School of Education, Ibaraki University, Mito, Japan)

じめを原因として自らの命を絶つ子どもや若者たちに加えて、近年は飲酒運転などの交通事故、虐待、凶悪な犯罪に巻き込まれて命を奪われたり、自ら犯罪を犯して他者を死に至らしめる子どもの事件報道が後をたたない状況である。このような社会状況を受けて、わが国では1990年代後半から、いのちの教育実践が行われはじめた⁴⁾。近藤によるわが国のいのちの教育に関する全国実態調査⁵⁾によれば、2005年度では、すでにいのちの教育にかかわる何らかの実践を行っている学校は、小学校で7割、中学校で6割を越えるほど多くなっていると報告されている。この10年ほどの間にいのちの教育に取り組む学校が急増している。養護教諭が取り組む中学校での実践例として斉藤⁶⁾や根本⁷⁾・山田⁸⁾の報告がみられるが、I県では中学校での実践の公表例はあまりみられない。

そこで本研究は、I県内公立A中学校のB養護教諭が実践する「命の授業」を参観し、筆者が主催する養護教諭研究会で行った当該授業の検討において、授業の意図や授業構成、生徒の反応などを分析し、次なる授業実践に向けて課題を捉えることを目的としている。本稿はその第1報として報告する。

II 対象および方法

2009年2月27日(金)8:40~10:30(1時間目、2時間目)に、筆者がA中学校で実施されたB養護教諭による「命の授業」を参観し、ビデオに撮影した。その後筆者が主催する養護教諭研究会(2009年3月15日(土)13:00~17:00)においてメンバーと当該授業のビデオを視聴し、討論を行った。それらを質的に分析した。本授業の位置づけは、保健体育科(単元:現代社会を共に生きるために)のうちの1時間として行った。

III 結果および考察

1. 授業の展開

本時の学習指導案は資料1のとおりである。3年生4クラスを2つに分けて1時間目、2時間目で授業を行った。通常学級に生徒は収まらないため、多目的室を使用し、生徒は床(絨毯)に座って受講した。

本時の目標は「生物の誕生からこれまでつなげてきた命のバトンについて理解することができる。」「一人ひとりがかけがえのない命を持っていることを理解することができる。」「自らのこれまでの振り返り、さらにこれからの自分のあり方を考えることができる。」の3点があげられている。

導入では、授業者から本時のテーマが告げられ、「私たちの命はどこからきたのか」と発問が投げかけられる。ここでは思考させることを目的として、返答は求めない。

展開では、初めの15分間でスライドを使用して、効果音(BGM)を流しながら授業者が説明を行った。生命誕生の歴史をわかりやすい図や絵を用いて生徒を引きつけた。スライド終了後、本時の主題である「命のバトンを考えてみましょう」と授業者は投げかけ、展開の二つ目に入っていた(31分間)。ここでは、授業者のメッセージとして「命はすべて平等であること」「わたしたちの

資料1 本時の学習指導案

第3学年 保健体育科学習指導案

題材名「命の授業」

日時：平成21年2月27日（金）2時間目

場所：水戸市立第一中学校多目的室

授業者：木下正江

〈本時の目標〉

- 生物の誕生からこれまでつながってきた命のバトンについて理解することができる。
- 一人ひとりがかげがえのない命を持っていることを理解することができる。
- 自らのこれまでを振り返り、さらにこれからの自分のあり方を考えることができる。

〈本時の展開〉

時間 (分)	学習活動及び学習内容	教師の指導・支援	備考
導入 2	1. 本日の授業のテーマを理解する。	○今日の授業のテーマは「命の授業」であることを告げる。 発問「私たちの命はどこからきたのか？」	フラッシュカード「生命」・「私たちの命はどこからきたのか」
展開 15	2. 命の起源と命のつながりをスライドを通して学習する。 3. 命の誕生を理解する。 4. 人の祖先の出現を理解する。	○スライドを見る。 ○人類の他に多くの生命があることに気づかせる。 ○原始生物（バクテリア）の誕生を伝える。 ○人の祖先（脊椎動物）の出現を伝える。	パワーポイント「私たちはどこから来たのか～生命 40億年はるかな旅 ⁹⁾ 」, BGM
31	5. スライドの復習をする。 6. どんな命も平等だということを理解する。 7. 自分たちの命は多くの命のバトンのうえにあることを理解する。 8. 自分たちは遺伝により多くの情報を受け継いでいることを学ぶ。	○私たちの命は1個の生命の誕生からつながってきたことを伝える。 ○スライドのまとめをする。 発問「命のバトンを考えてみましょう」 ○命はすべて平等であることに気づかせる。 ○これまで絶滅してきた命がたくさんあること、それらの多くの命の犠牲のうえに現在の命があることを伝える。 発問「君たちはどうして、ご家族の人に似ているの」 ○細胞の核には、遺伝子があり、その中に染色体が存在することを伝える ¹⁰⁾ 。	フラッシュカード「命のバトン」・「平等」 人の形の図・細胞の図・DNA・染色体の写真・胎児の写真・

	<p>9. 自分たちは他の命をもらいながら生きていることを学ぶ。</p> <p>10. 私たちの命は限界があることを理解する。</p> <p>11. 自分と同じ年齢の女子生徒の生き様を想像し理解する。</p> <p>12. その子の命の意味を深く思考する。</p> <p>13. 自らの命について深く思考する。</p> <p>14. ウルマンの詩を理解する。</p>	<p>○人はたった一人では生きられないことを伝える。</p> <p>○命には限界があることを伝える。</p> <p>○命の限界に挑戦した病気を持った一人の女子生徒の話語る。</p> <p>○夢は人に勇気と希望を与えることを伝える。</p> <p>発問「この子は何のために産まれてきたの？」</p> <p>○その子の夢はその子を支えていたけれども、実はその子の周りの人たちもその子から勇気と希望をもらっていた。そのことを伝えるためにその子はこの世に産まれてきたことを語る。</p> <p>○この世に無駄な命は一つもない。いろいろな命は全くないことを語る。</p> <p>○命の重みをしょって生きていってほしい。夢を持って生きてほしいというのが授業者の願いであることを伝える。</p> <p>○「命の奇跡」は今日こうしてみんなと出会ったことであることを語る。</p> <p>○「自分はどう生きるべきか」を問い続けていってほしいことを伝える。</p> <p>○サミエル・ウルマンの詩「青春とは・・・」を朗読する。</p>	<p>花・蝶・トンボ</p> <p>フラッシュカード「命の限界」</p> <p>フラッシュカード「命の奇跡」</p> <p>BGM</p>
<p>まとめ 2</p>	<p>15. ワークシートを記入する。</p>	<p>○今日のまとめをする。</p> <p>○ワークシートの記入を指示する。</p>	<p>ワークシート</p>



図1 授業風景

命は多くの命の犠牲の上に成りに立っていること」「たった一人では生きられないこと」を力強く伝えた。それは、授業者の声、視線、口調、声の大きさ、身振り、手振り、間、教材を駆使したものであった。生徒たちは集中していった。そしてクライマックスとなる病気で亡くなった女子生徒の話に入っていった。授業者の「この子は何のために産まれてきたの？」という発問は、生徒にとって重い課題であった。この授業が始まるまで、日常のくたくのない生活空間で過ごしていた生徒たちは、この発問によって一挙に同年代の生徒の生と死に直面することになった。生徒の集中度は最高潮に達した。授業者は、その子の保育士になりたいという夢とその夢に向かう女子生徒の姿は、実はその子の周りの人たちに勇気と希望を与えていたということに気付かせる。そして無駄な命は一つもないと静かに語った。

展開の後半は、詩の朗読をして、生徒たちは静かに聞き入り、今日の授業の振り返りをした。そしてまとめでは、ワークシートの記入をして授業は終了した。

2. 生徒の感想について

表1に授業後の生徒の感想（抜粋）をまとめた。近藤はいのちの教育の目的は3つにまとめられるという¹¹⁾。①子どもたちが自分自身の「いのち」はなにより大切だということを実感し確認する

表1 生徒の感想（抜粋）

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 「命」という言葉の重みが最近軽くなってきたように思う。あらためて「命」の授業を聞いて、その大切さを再認識した。祖先の命を受け継いでいる自分だからこそ、自分の命や相手の命を大切にしたい。（男子） ・ こんなにも私達を支えていた生命がいたなんて知らなかった。たくさんの偶然が重なって、ここにいるみんなに出会うことができた。みんなに会えたことも、B先生に会えたことも私が生きていることもすごい。最後の授業はすごく感動した。これからは、もっとたくさんのものに感謝の気持ちを忘れず、日々生活していきたい。（女子） ・ 私はこれから自分らしく生きていきたい。自信がなく、自分を出すことができなかった。自分らしくありのままに生きようと思い始めた。（女子） ・ ムダな命は一つもないのだから、他人を傷つけたり、自分を傷つけたりしてはいけない。一日一日を大切に生きていきたい。（女子） ・ 命は、はかないものだということ知った。命の大切さを考えることができた。先生の思いが伝わってきてとても充実した時間だった。（女子） ・ 世の中には生きてたくても生きられない人がいる。その人の分まで夢をもち、苦しくてもめげずに生きたい。（女子） ・ この授業を通して「なぜ生きているのだろうか。」とか「生きていく意味があるのか。」とか、今まで感じていたことの答えが少しわかったような気がする。命のバトンをしっかり次に渡せるように生きたい。（女子） ・ この授業を通して、生命の尊さ・美しさが伝わってきて、とても不思議な気持ちになった。これを機会にもっと命の大切さを感じながら、一日一日を大切に生きていきたい。最高の人生を送りたい。（男子） ・ 普段は考えたこともない、大昔からの命のつながりや命がもつ歴史の重みについて感じることができた。自分だけでなく、他人の命や他の生き物の命も同じように大切だと思った。（男子） ・ どんなに苦しいことや辛いことがあっても、あきらめないで強く生きていこうと思う。そして、できることなら少しでも他人のために働ける人になりたい。（男子） |
|---|

こと。②そうして確認した「いのち」の大切さが、普遍的なものであるという認識に立つことができるようになり、他者を思いやることができるようになること。③いのちを維持し育む自然環境・社会環境を、守り育てる態度や行動がとれるようになること。生徒の感想をみると、上述の①と②の目的が達成されたと評価することが可能である。それまで日常を何気なく過ごしている生徒たち、彼らは自分の健康や体力や若さを謳歌して、命の何ものも疑う瞬間のない生徒たちである。本授業を概観するとおり、その生徒たちが50分間の授業を受けることによって、深く自分の命の大切さを再認識したり、他者の命の重みを感じ取ることができ、人との支え合いがかけがえのないものであることを実感していることが推察される。

本授業は、夢を持って人生を歩んでほしい、命は一つ一つかけがえのないものであるという教師としての胸の底からの願いを結晶させ創出された授業であった。

3. 研究会での討論

授業者の自評として、生徒が座学であったため、授業者の視線が上からであったことが残念であったこと、授業作りでは「命の授業」のサンプルを見たことがなかったのですべてオリジナルで作成したこと、無駄な命はないということが最も伝えたいメッセージであったことなどが語られた。

出席者からは、フラッシュカードの「生命」「命」の使い分けの意図に質問が出され、授業者から、養護教諭は生命科学を学ぶ立場から「生命」を用いると考え「生命」と「命」を両方用いたと説明がなされた。近藤は、「生命の教育」や「命の教育」としないのは、生命や命の漢字が、身体的な側面に特化した印象を与え、身体的な死との関連で想起されると考えられるため、「いのちの教育」と表記している^{12) 13)}と述べているが、これは、臨床心理士の立場からの考えといえる。養護教諭の専門性は子どもの心と身体健康支援にあることから、言葉の表記は何が望ましいのか、今後も議論していくことが望まれる。

さらに、授業終了後にビデオ視聴をして討論する授業研究については、授業者からは「自分の授業を見ることにより、自分の欠点がよくわかり、客観的に見れて、自分のアップにつながっていくことがよくわかった」という感想があった。これは、自らの実践を省察し、改善点を見出して、次の実践に活かしていくアクション・リサーチ¹⁴⁾により実践者の自己成長が促される¹⁵⁾ことを示唆している。また、参加者より、「一緒に参観した体育の教師を実は育てていることにつながっているのではないか」という意見があり、同僚性¹⁶⁾を指摘した意見があった。養護教諭が授業をすることによって、同僚や後輩の教師を育てる意味があることが示唆された。

4. 今後に向けて

B養護教諭が本授業を実践したことが、A中学校へ一つの波紋を投げかけ、来年度はもっと時間数を増やして担当してほしいという依頼につながった。来年度は「死」を扱う内容にしたいとB養護教諭は構想している。家族の命を失ったり、奪われたりした残された家族や被害者による地道な活動が全国各地でなされている^{17) 18)}。また、被害者の立場からの様々な研究協議¹⁹⁾が行われている。「命の授業」が取り上げる題材は、差別や偏見、いじめ、暴力、友情、恋愛、協力など²⁰⁾多岐にわたる。「子どもにとって、家族の死や本人にとって情動的に重要な人の死がもたらす影響は大きい」²¹⁾ことから、子どもの発達段階、一人ひとりの子どもの状態、地域や家庭の状況などを十分吟

味し理解した上で、周到な準備をして実践しないといけない²²⁾。「命の授業」の目的設定を充分検討した上で、どこを切り口として、生徒と命を対面させていくか、今後も実践を重ねるなかで練り上げていくべき終わりのない教育活動である。次年度の「命の授業」実践も引き続き授業研究を行い、次報で報告することとする。

IV まとめ

I 県内公立A中学校のB養護教諭による「命の授業」実践の授業研究を行った結果、以下の諸点を確認した。

1. 本授業は、地球上に生命が誕生した歴史を科学的に追っていき、遺伝子や染色体など生命科学の側面から人の命に続く連続性を軸に構成されていた。
2. 50 分間の授業を通して、生徒は多くの命の連続の上に立つ自分の命の大切さを再認識したり、他者の命の重みを実感することができ、人との関わりがかけがえのないものであることを熟考することができた。
3. 授業者の「夢を持って人生を歩んでほしい」「命は一つ一つかけがえのないものである」という教師としての願いをメッセージとして生徒に伝えることができた。
4. 授業研究を通して、授業者は授業の振り返りをして省察することができたとともに、参加者は授業のビデオ視聴と授業者の発言から授業者とともに学びを深めることができた。

謝辞

最後にB養護教諭の「命の授業」の参観を快くご許可くださいましたA中学校校長先生はじめ諸先生方、3年生の生徒の皆様にご心より感謝申し上げます。

文献

- 1) 朝日新聞、自殺最悪ペース、7月28日付、2009.
- 2) 厚生統計協会『国民衛生の動向』（廣濟堂、2008）、54.
- 3) 朝日新聞、児童生徒自殺学校対応の指針、8月23日付、2009.
- 4) 近藤卓「いのちの教育概説」『現代のエスプリ』、499、2009、13.
- 5) 近藤卓「わが国におけるいのちの教育—全国実態調査の結果から」『現代のエスプリ』、499、2009、51.
- 6) 斉藤章代「生と死について考える「いのちの教育」」『体育科教育』、49(14)、2001、50-53.
- 7) 根本陽子「保健学習から発展した総合的な学習「命の大切さ」」『体育科教育』、50(2)、2002、54-57.
- 8) 山田泉『「いのちの授業」をもう一度』（高文研、2007）.

- 9) NHK取材班『NHKサイエンススペシャル1「生命－40 億年はるかな旅」』(日本放送出版会, 1998).
- 10) ニュートン別冊『性染色体と「男と女のサイエンス」性を決めるXとY』(ニュートンプレス, 2006).
- 11) 前掲書4), 6.
- 12) 前掲書4), 9.
- 13) 近藤卓「いのちの教育と総合的な学習の時間」『学校メンタルヘルス』, 3, 2000, 80.
- 14) 秋田喜代美他編『教育研究のメソドロジー 学校参加型マインドへのいざない』(東京大学出版会, 2005), 167-168.
- 15) 秋田喜代美他編『はじめての質的研究法 教育・学習編』(東京図書株式会社, 2008), 243-248.
- 16) 高橋香代「養護実践を豊かに」『日本健康相談活動学会誌』, 1(1), 2006, 10.
- 17) スローライフ交通教育の会, <http://www.asahi-net.or.jp/~hz2t-med/site2/mokuji.htm>
- 18) 北海道交通事故被害者の会「パネル展示」, 30, 2009, 12.
- 19) 第13回国際被害者学シンポジウム, 2009. http://www.isv2009.com/index_j.html
- 20) 近藤卓「いのちの教育と学校カウンセリング」『保健の科学』, 46(10), 2004, 732.
- 21) シンシア・R・フェファー『死に急ぐ子供たち(高橋祥友訳)』(中央洋書出版部, 1990), 6.
- 22) 近藤卓「いのちの教育のカリキュラム作り」『教育展望』, 50(10), 2004, 47.

Abstract

In recent years, there are continuing cases of children losing lives due to traffic accidents, child abuse, suicide because of bullying, and crime. Under these social backgrounds, many educational practices related to life are being conducted in Japan since the second half of the 1990s. In 2005, educational practices related to life were conducted in almost 60 % of junior high schools. In this study, teaching about lessons in life by a nurse-teacher at a municipal junior high school in Ibaraki Prefecture is performed. The researchers aimed at clarifying the significance of the practice by analyzing the intention and the structure of the lesson, and the reactions of the students.